

短期海外プログラムにおける安全の強化：感染対応と自由旅行対応

鈴木, 右文
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/7170867>

出版情報：英語英文学論叢. 74, pp.37-57, 2024-03-14. Department of English, Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



短期海外プログラムにおける安全の強化

— 感染対応と自由旅行対応 —

鈴木 右 文

1. はじめに

筆者が運営を担当してきた「ケンブリッジ大学英語・学術研修」は¹、ケンブリッジ大学ペンブローック・カレッジ (Pembroke College) で行われる現地研修と九州大学で行われる事前研修とに分かれており、全体として九州大学基幹教育の言語文化基礎科目である「学術英語・集中演習」として位置づけられてきた。ところが2019年夏の現地研修実施を最後に、コロナ禍による中断の期間が生じ、その再開にあたっては、コロナ禍中に諸般の理由によって高騰した費用への対応のため、研修の運営が九州大学大学院言語文化研究院の委員会による方式へと変更され（経緯は鈴木（2023）を参照）、2023年夏現地研修となる回（2023年組と称する²）から再開を果たすことができた。

本稿では、実際に2023年組の準備と引率業務を終えたのを受け、まずコロナに関係して行った感染予防と実際に発生した場合の対応とについて報告と考察を行う（2.～4.）。さらに、現地で経験した現地週末自由旅行における鉄道ストライキ（industrial action）への対応をきっかけに、週末旅行、英国との往復移動、現地での生活の3点について、危険回避

-
- 1 本研修は廣田稔九州大学名誉教授のカレッジに対する三顧の礼によって開設されたものである。筆者が後任となってからの内容等の概略については鈴木（2013）に詳しいが、10年が経ち、かなり情報が古くなっている。なお、英国での発音ではカレッジ名の表記を「ペンブルック・コレッジ」とするのが適切かもしれないが、最初に「ペンブローック・カレッジ」の表記を使用したため、一貫性のため長年この形で推移している。
 - 2 「XXXX 年組」とは年度別の参加者を指しており、当該年の8-9月にかけて現地研修に渡英する参加者たちを指している。この参加者たちにとっては、現地研修の前年5-9月頃が募集期間であり、11月から現地研修の直前の8月上旬まで学内で事前研修を積む。

のために準備段階や現地研修で指導・留意したことを振り返り、点検と考察を行う（5.～8.）。

いずれも安全確保のための準備と現地での危機対応に関わる問題であるが、両者には大きな相違点がある。前者については、およそどの短期海外プログラムでも経験する可能性があり、現地受入側も参加側もそれぞれのスタッフが責任の一翼を担うのに対し、後者については、原則として現地プログラムが休みの日に、参加者がグループ毎に任意で行っているものであり、スタッフ側の関与には限界がある。しかしだからといって事故が発生した場合、九州大学言語文化研究院および引率教員の責任は免れず、できるかぎりの準備と現地での体制が必要となる。但し週末旅行を含めた後者には教育的な側面もあり、「ここは日本ではない」という内容の指導や経験は、自分や自国の文化を相対的に見ることができるようになる機会として貴重であり、そのような方面にも配慮する形で参加者に注意を喚起している。

2. 感染予防対策

2020年夏、2021年夏、2022年夏の3回分現地研修が中止となった原因はコロナであり、特に2020年夏と2021年夏では、国による緊急事態宣言が繰り返されている最中であつたため、実施すべくもなかった³。2022年夏についても慎重を期して再開を見送った。2023年夏については受入先との密な連絡を取り合っていたが、再開確定の連絡が届いたのは2022年9月で、例年なら5月に始まる募集期間が終盤を迎える頃であつた。まだ日本でもコロナが法的に5類に移行するよりずっと前の段階であつたため、恐る恐るではあつたが、慌ただしい再開だった。

事前研修は、従来から現地研修の前年11月頃から出発直前の8月上旬にかけて実施されていたが、2023年組は始動が大幅に遅れたため、渡航の前年9月から開始して11月までの短期間に募集を行い、例年より1カ月遅れで12月から事前研修に入った。平日に短い会合を重ねるほか、12月、4月、6月、8月のそれぞれ土曜日に終日の学習連絡会と称する会合を持ったが、例年であれば学習連絡会直後に懇親会を実施するとこ

3 2020年夏については、募集を行い、事前研修を半分ほど実施した後で中止となったが、2021年夏、2022年夏については募集自体が行われなかった。

ろ、2023年組の場合は、感染防止の観点から（飲食を伴うため、どうしてもマスクをはずすことになる）、一度も実施することがなかった。特に8月上旬実施の学習連絡会の場合は、万一感染が発生すると渡航が間に合わなくなる可能性が生じる時期であり、参加者・引率教員ともに慎重にならざるを得なかった。そのため、例年であれば珍しいことであるが、現地に行くまで全く話をしたことのない仲間が一行にいるという参加者が、2023年組の場合には続出した。志の高い参加者同士の高め合いから生涯の友を得るのがこの研修の特長のひとつなのだが、極めて残念なことであった。事前研修ではさまざまな指導を行うが、現地への往復旅程に影響が出ないように、渡航直前の期間および現地滞在中における感染防止に特に努めるようにという指導を行った。

また、2023年組の事前研修期間中に新たなコロナ関係の危険に気がついた。受入先のカレッジとの契約によると、例年6月末頃に設定される送金期限までに実際の参加人数に基づいて支払う現地経費⁴、送金以降に現地研修を中止すべき事情が生じても、英国やカレッジに責のある理由でない限り、返金を受けることが極めて難しい。従来はそのような事態は想定外だったのだが、新たなコロナ感染の再燃や他の深刻な感染症が発生した場合に、英国が日本人の入国を妨げていない状態でも、日本が英国への渡航中止勧告を発出する可能性が少なくとも論理的にはありえるため、そのようなケースが万一発生した場合には、たとえ現地研修を全くキャンセルしても、カレッジにいったん支払った金額が全く戻って来ない可能性がある。

2023年組については、この可能性に思い至ったのが事前研修中であり、この可能性を含みおくことを応募の条件にすることはできなかった。もしそのような条件を明記しても、さしたる対策を示さなければ、応募にブレーキをかける結果となり、実際に最低催行人員ぎりぎりしか集まらなかった2023年組は、募集締切段階で中止となっていたであろう。そうなれば長く続いたこの研修も、歴史に幕を降ろす可能性もあったと思われる。結果的にそれは現実とはならなかったのだが、2023年組

4 内訳は、授業料、寮費、3回のレセプション・晩餐会と午後茶会を含む食事代、施設利用料、6-7名程度の現地学生スタッフ（programme assistants）の雇用経費、ヒースロー空港とケンブリッジを結ぶ往復分の貸切バス代となっている。

の場合は結果オーライであったに過ぎない。募集内容の策定準備が現地研修の前年1月頃から始まるため、募集要領に含めるべき新しいことが生じても、募集要領の公開（例年4月初めころ）までにすべて間に合わせるということは困難であり、これだけ募集時期が早いとどうしてもこうしたことが生じやすい。現在では保険の特約に加入するという解決策を見出しているのだが⁵、2024年組については最初から募集案内の参加条件の項目に、この保険特約に強制加入とする点を明示している。

既述のように事前指導を実施したのだが、実際にはコロナが感染症法上の5類に移行して、マスクの着用は任意、着用も非着用も強制されないという世の中の状況に変わって、次第に参加者の警戒心も薄くなっていったように思われる。そのためかどうかはわからないが、3.で見るように、残念ながら実際には2023年組で感染により現地研修への出発日に間に合わない参加者も生じてしまい、また4.で見るように、現地で感染して隔離された参加者も生じてしまった。

3. 出発直前の感染対応

コロナ感染はそれ自体参加者本人にとって肉体的精神的に負担の大きなことであるが、それが原因で現地研修への出発に間に合わない事態はさらに深刻である。

2023年組では残念ながら1人該当者が生じた。8月20日（日）午前10時30分に福岡空港国内線ターミナルに集合（その後は午後の便で羽田空港へ移動、空港内のホテルに宿泊後、翌日午前9時55分発の国際線に搭乗⁶）の予定であったのに対して、感染の第一報は8月19日（土）午後12時40分のメールであった。18日（金）の晩に発熱ということで、飛行機での移動は遠慮すべき状態と判断し、本来週末はお休みの旅行者に何とかメール連絡を取り、以降翌々日の国際線出発までこの件の対応に追われた。また一方では現地での鉄道ストライキの設定の第一報も19日（土）午後1時49分に飛び込み、現地滞在期間中の週末に参加者がそれ

5 その経緯については鈴木（2023）を参照。

6 国際線のロシア上空通過ルートの回避のため、所要時間が伸びており、羽田空港発の国際線に間に合わせるために前泊を要した格好だが、本来の午前11時台発の場合でも、早朝の福岡集合は寝坊の可能性を考えて従来から避け、羽田空港前泊を繰り返して来た。

それぞれの計画ででかける旅行にどれだけの影響が生じるのかの調査（あらかじめ提出を求めチェックに合格していた旅程に基づく）も同時に進めて、福岡空港集合前までに何らかの考えをまとめておく必要が生じ、筆者は鉄道に関しては割合に詳しい身でありながら、正直なところ半ばパニック状態となった。この時点から20日（日）夜までの隙間時間に調整にあたった結果、感染した参加者には、相談の上で8月23日早朝に福岡を出発する便に搭乗して何とか同日羽田空港9時55分発の便に間に合わせてもらい、同日中にケンブリッジ入りしてもらうこととなった⁷。当該参加者が第1報第2報の段階から、日本の感染時対応のガイドラインを熟読し、いつから外出が可能になるかを調べ上げていたため、筆者としては大変助かった。そのあたりの担当者としての準備が弱かったと反省した。

但し、本来引率者付での団体移動の予定だったものが1人での移動となるため、手続きや移動の道順等を細かく知らせておく必要があると思われたが、準備は時間との闘いであった。羽田空港からの国際線はなぜか例年と異なるターミナルからの出発となっており、実際に歩いて移動し道順を確認したが、ロンドン着以降については、コロナ禍で長らく渡英が中断していたため、筆者の過去の経験のとおりになっているかどうかもわからず、祈るような気持ちで指示を書いた。到着のロンドン・ヒースロー空港からケンブリッジ方面への電車のターミナルであるロンドン・キングズクロス駅への移動では、乗換え不要を優先して地下鉄ピカデリー線（Piccadilly Line）利用を前提とした。1回の乗換えは要しても、時間的に早いヒースロー・エクスプレス（Heathrow Express）かヴィクトリア・ライン（Victoria Line：最近開通したロンドン市交通局運営の市域高速鉄道）の利用も考えられたものの、前者は筆者に乗車の経験がなく、後者はコロナ禍中の開通でさらに筆者にとって細かい指示の書きようがなかったため、狭くて（大型スーツケースは置き場所に困る）遅いが直通のピカデリー線で我慢してもらった。当該参加者本人は相当に不安だったに違いないが、ヒースロー空港着と同時に携帯をオンにもらい、いざという場合は筆者の携帯に電話ができる体制を取った。今

7 現地研修には2日遅れでの合流となるが、1日はオリエンテーションなので、授業については実質最低限の1日の犠牲で済んだ。

後は1人で遅れてくる参加者へのわかりやすい指示書を予め作成しておくとういと考えた。

この参加者は往路が団体と別便の利用になるため、少なくとも往路の搭乗便変更ができれば問題ないわけだが、旅行業者がお休みの週末にあっては予約の先送りや別途手配の相談もできない。20日（日）の福岡空港集合直前に利用航空会社のカウンターで尋ねたところでは、団体なので、キャンセルや予約便変更などの相談は手配した旅行業者でしかできないと思うが、国際線については羽田空港カウンターで聞いて欲しいとのことだった。連絡のついた旅行業者も週末には各種の手配については動けず、国際線の出発する21日（月）の朝一番に航空会社に連絡するとのことだった。羽田空港へ移動後、特殊事情により羽田空港前泊から合流する2名と指定場所で落ち合い、空港内ホテルでのチェックインを済ませ、参加者に翌朝の集合場所と時刻などの諸注意を与え、国際線第3ターミナルへ移動して（翌日利用予定の第2ターミナル国際線は昼過ぎで閉鎖）航空会社カウンターに出かけたところ、電話で予約関係責任部署と思われるところに問合せをしてくれたが、結局のところ航空会社としては何もできないとのことで、この時点での筆者の判断は、当該参加者が直ちに往路の後日の便をどの航空会社でもよいから個人でウェブ上にて（週末には旅行業者の窓口は開いていないし、翌日になると満席の危険が生じるかもしれない）手配すべきで、本来の往路の団体枠での予約分は出発時刻までにキャンセルすることさえできそうにないので、後で規定通りに扱われざるを得ないというものだった。

しかしこの後旅行業者から、団体なので、当該参加者は、往路だけ予約便を別途手配して復路は団体の1人として予定どおりの便に乗るということとはできないとの連絡を受けた。団体で往復予約した後で片道だけ放棄することはできないとのことである⁸。結果として、当該参加者には、往路はどの航空会社でもよいので、最速で渡英できる便をウェブで個人的に予約し、復路は団体と同じ便を個人的にウェブで予約するように連絡した。結局当該参加者は自身で団体と同じ航空会社の便を往路は2日遅れの便、復路は同じ便で個人予約した。往路は残席僅少の際とい

8 指定便に搭乗し全行程団体行動することを条件に割引される一般のパック・ツアーと同様だと理解した。

予約であり、復路も団体と同じ便を予約できたのは不幸中の幸いだった（正規運賃なので相当な金額であった）のだが、団体枠の予約を往復とも使わないことになったわけで、その分のキャンセルと返金はどうなるのかがわからない状態で時間切れとなり、筆者を含む団体は不安な状態で21日（月）朝の国際線に搭乗した。

その後、搭乗しなかった団体枠については、返金（額は不明）が行われる旨2023年末に旅行業者から連絡があったが、1月になって、コロナが5類になった後のことにもかかわらず、特例措置としてかなりの返金があったものの、通常ではこうはいかないということであった。こうしたことになりうるということを予期することができなかったのは申し訳なかったが、今後は、本来の便に乗れないのであれば、最悪の場合往復別途正規運賃で個人手配を行うことになることを、事前に参加者に理解しておいてもらうことが必要である。

4. 現地研修旅行に係る感染対応

2023年組の場合、8月21日（月）夕方にカレッジ着、9月11日（月）昼過ぎにカレッジ発であったので、21日弱の現地滞在期間であったが、この短い期間にもし感染・発症した場合は、かなりの間活動ができない隔離状態になるため、体温計を必携とし、さらに感染に注意するようにとは事前に指導した。しかし、現地の人々は誰もマスクを着用しておらず⁹、研修参加者も同調せざるを得なかった。

それが災いしたのかどうかは知るよしもないが、九州大学からの参加者に感染者が1名発生した¹⁰。8月30日（水）夜に喉の不快感が始まり、31日（木）には微熱と倦怠が認められた。筆者に当該参加者からメールで第1報が来たのは同日正午頃（現地時間、以降同様）であった。直ちにプログラム責任者（Programme Director）に相談し、検査キット等もらい受けた。その夜には体温が36.6度だったが、翌1日（金）朝には38.6度に上昇した。当該参加者は慎重な性格で、抗原検査キット1つとマスク15枚程度を持参していたため、筆者が届けるまでもなく、持参した

9 現地滞在中にカレッジ外で見た現地のマスク着用者は1名だけだった。感染者が必要があって外出したのではないかと推測している。

10 現地研修を共有している成蹊大学からの参加者には発生しなかった。

キットで自己検査できたのだが、結果ははっきりとした陽性（strongly positive）であった（検査結果の画像をメール添付で送付してもらった。以降筆者が届けた検査キットでの結果も同様）。

前日夕食からは筆者が当面の間食堂で買い求めた飲食物を居室まで運び、求めに応じてティッシュ等の買物を代行した。部屋の入口ドアのところに置いてノックし、筆者が立ち去ってから部屋に入れてもらうこととし、直接対面することがないようにした。授業等はお休みとし、トイレと入浴以外は部屋に留まるように指示して、部屋入口ドアには感染発生の札（カレッジの常備品）を貼った。2日（土）と3日（日）は筆者も海外出張中の公式なオフ日で、他の参加者同様、両日とも外出を予定していたのだが、2日は外出を中止して待機した。3日については、当該参加者は重病というわけではなく医療を受けているわけでもないのので申し訳ないとは思いつながら、待機と食事の手配等をプログラム運営に関わっている現地学生のアシスタントたち（Programme Assistants）に依頼して、ロンドン郊外の城郭見学に出かけた（事前研修の英国史に登場する人物が生まれ育った場所だったので、ぜひ見ておきたかった）。こうしたことについては、以前の現地研修期間中に、筆者本人が豚インフルエンザに感染して数日間の隔離を受けた経験があったため、比較的冷静に対応することができたのではないと思われる。

当該参加者は9月3日（日）夜には平熱に戻った。しかし翌朝の検査結果は依然として明らかな陽性であり、隔離を解くわけにはいかなかった。この後もおおむね平熱が続いたが、倦怠感や嘔吐などの症状もあり、一時陽性が弱くなったが、5日（火）には隔離でかなり精神的にも参っている様子が見てとれ、メンタル的に寄添うようメールのやりとりを行った。仲間たちも心配して買物を代行してくれるなど、孤立を避ける方向での協力が行われた。しかし、6日（水）朝の検査結果はまたもはっきり陽性であった。同日カレッジの看護師にアポを取り、筆者が面談したが、英国ではこのような状況は日常茶飯事とみえ、マスクを着用しソーシャル・ディスタンス等に留意すれば大した感染の心配はなく、外出しても大丈夫と笑っておっしゃっていた。これを機にプログラムの最終授業日の7日（木）にはマスクを着用し、発話せずに最後の授業と試験を受け、修了式では現地スタッフと握手せず、お別れ晚餐会にも特別に手配してもらった他の参加者と少し離れた席につき、かろうじて最後

の行事をこなした。そして8日（金）には陽性が薄くなり、予定どおりケンブリッジ市内を単独で探索した（他の参加者についても、この日はお別れ晩餐会の翌日で、前夜は遅くまで語り明かしたに違いなく、基本的にケンブリッジと隣町のイーリー（Ely）を範囲とした外出に制限していた）。9日（土）には予定していたロンドン行きを、同行者の了解とマスク着用等の配慮のもとで、敢行した。帰国出発日の10日（日）朝になってもわずかに陽性の筋が検査結果に見られた。こんなに長いこと検査結果が完全な陰性にならないものだということを思い知った。

当該参加者の様子については、プログラム責任者とも頻繁なやりとりで情報共有を行い、万全に近い体制であったと思うが、コロナに限らず、隔離すべき感染症の場合、本人はかなりの期間の体験の機会を失い、甚大な喪失感があるものと考えられる。感染症は感染するときはするので、粛々とケアを行う以外にできることはない。だが、今回のケースは結果的に過剰対応であったかもしれず、当該参加者には申し訳ないことをしたのかもしれないと思っている。もう少し早くカレッジ・ナースに面談すべきであったかもしれない。

また、今後感染により帰国便に間に合わない事態が生じたときのことが心配である。そのケースでどうするかについてはかなり以前に熟慮したことがあり、団体が帰国した後も隔離状態で必要なだけ滞在させ、新たな帰国便を手配し¹¹、帰国日には現地スタッフに空港まで付き添っていただくという結論に達したのだった。但し現在では、帰国出発日とカレッジの正規学期の開始日との間が数日しかなく、その間に正規学生が戻ってくるため、実際にこのような事態が生じたときはかなり際どいことになるものと覚悟している¹²。

11 復路の国際線を新たに予約しなおすにあたって生じた損害については、コロナが海外旅行保険でカバーされていた時期はよかったのであろうが、現在ではコロナが原因でも自己都合とみなされ、保険でカバーされることはないと思われるので、実際に発生した場合のコストは甚大なものになる。

12 ではプログラムの期間を数日でも前倒しすればよいではないかということになるが、その場合は国際線の利用が8月20日までの航空券のお盆期間にかかり、コスト的に困難かもしれない。また、現在前期授業終了後に最後の学習連絡会を実施しているが、前倒しを機に感染した場合の「出発日に間に合わない」ケースが生じる可能性が高まることになる。

5. 週末旅行に対する事前準備支援

この研修では3回の週末があるが、現在では原則として第1週末では土日のうち天気のよい方で、ケム川（River Cam）のパンティング（Punting）と隣村グランチェスター（Grantchester）の屋外果樹園喫茶店 The Orchard へのハイキングを行う。天気のよくない方の日には、ケンブリッジ市内（と年によっては隣町のイーリー（Ely））を範囲として、自由に外出できる日としている。第2週末は金土日の3連休とし（木曜日ロンドン発の夜行列車 Caledonian Sleeper の寝台利用も認めている）、第3週末は土日の2連休としている。こうして合計6日間の完全自由日があるのが通例である。

第1週末では、土日のどちらが自由日になるか現地に行ってみないとわからないため、事前に予約手配等を行うことができないが、第2週末と第3週末については、参加者が思い思いにグループを編成して自由に計画を立てることができるため、計画策定や予約手配等に関する指導を行っている。但し週末旅行時は、参加者・引率教員ともにオフであり、それぞれ自分たちの責任において計画を立てて実施するものと互いに了解し、その条件のもとで研修に応募してもらっている。

せっかく現地にでかけても、滞在先に閉じこもるだけであれば何とももったいなく、この研修では参加者の安全意識の高さと緻密さとを頼みに、安全指導や計画・手配の支援、各地への訪問の意義の講義等をサービスとして行った上で、自由に旅行をしてもらっている。但し旅行の範囲は英国内とし、ケンブリッジから見て、陸路（橋を含む）で到達できるところまでとしている（ワイト島（Isle of Wight）は15分程度の定期船で行けるため、唯一の例外として可としている）。スコットランドの端までも行けるわけで、現に過去においてハイランド（Highland）のフォートウィリアム（Fort William）まででかけたグループもある。

安全対策として、ケンブリッジ外に出かけるときは、指定日の隣町イーリー以外の場合、必ず複数で出かけることを求めている（ケンブリッジ内でも夜間カレッジ外では複数での行動としている）。但し親類を訪ねる等の場合には、事前研修の間に相談を受け、目的地近くの公共交通機関の駅・停留所まで送迎に来てもらうことを条件に、単独行動を認めている。複数で出かける場合でも、宿泊施設や寝台列車での男性1名女性1名の同室を避けてもらっている。

計画については4月、6月に計画書を各参加者から提出してもらい、チェックを行い、筆者の長年の経験に基づき、無理な行程には指導を与える。以前は仲間に任せきりの参加者がいることがあったが、そういう参加者が現地の週末旅行で一行からはぐれると危険なため、現在では、グループの全員が準備に手分けして参加することと、全員が旅程や準備状況について同程度に理解していることを求めている。計画書の記載内容から、メンバー間の記述の食い違いや無理のある行程等を発見するたびに連絡して注意を促す。事前にしっかりとした準備をするからこそ、現地で互いに心配することなく、予定どおりに英国内をめぐることができる。事前研修の際には、必ず訪問先の地域や施設等の勉強をしておくことを求め、より一層訪問が身になるように努めてもらうこととしている。九州大学中央図書館には、英国に関するコーナーを設けてもらい、現地で入手したパンフレットや解説書、写真集の類を備え付けてもらっている。これらの資料は週末旅行だけでなく、事前研修での英国研究や英国史の勉強にも資する。

週末旅行の手配は、まず個人の志向として行きたい場所にあたりをつけ、似た希望を持つ仲間とグループを組み、おおまかな方面を決めた後、泊地を定めて、その後各日の予定を組んでいく。従って宿泊に関する手配が先となり、鉄道関係の座席指定やレイルパスの入手はその次の段階のことになる。但し寝台列車は1年前からの予約になるため、利用の場合はまずここから手配していく。この場合木曜夜ロンドン発の利用を認めているので、現地で金曜朝から動くことができるのは大きい¹³。

5.1 宿泊に関する指導

宿泊については、下記のような点について予め注意を与えている。いずれも該当のケースに遭遇した経験からのアドバイスである。

- ・単に2人部屋で探すとダブルベッド（英国ではこちらが通例）のこと

13 例えばエジンバラでの行動開始時刻は、寝台列車利用であれば午前7:30～8:30だが（エジンバラ到着後8時まで車内での滞留が認められている）、ケンブリッジを朝4時起きと無理をして始発列車に乗っても、エジンバラ着は午前10時を過ぎる。早めに起床しても現地着は午後になると考えた方がよい。

が多いので注意。

- ・宿泊施設独自の HP から確認した上で予約すること。
- ・予約業者サイトはトラブルが多いので避けること。
- ・民泊は避けること（安いが安全とは言えない）。
- ・B&B (Bed and Breakfast：英国式の民宿。民泊とは異なる) は大抵家族経営で、朝食が遅く、あまり早いチェックアウトは想定されていないため、早発の場合は施設に事前に相談すること。
- ・スタッフが不在でオーナーが電話等で管理する施設はなるべく避ける。
- ・施錠できる個室であることを確認すること（従っていわゆるユースホステルやバックパッカー向けの宿は認めない）。
- ・安すぎる施設は危険な地域にあったり、雑魚寝であったり、施錠ができなかったり、危険なことがある。
- ・チェックイン時に、予約されていないと言われることがあるので、証拠書類を必ず持参する。姓名が逆に予約されていることがある。
- ・稀にクレジットカードのリーダーが故障していて現金払いを求められることがあるので、十分な現金を持参すべきである。

この他宿泊施設には全員で同時に18時までにチェックインすることを求めている。これは、日本と異なり、予約したが無断で結局現れない客 (no show) を恐れ、英国では早めに予約を流すことがあるからである。また、1人だけ別行動で後からチェックインしようとして宿泊施設の場所がわからず往生するという事例に基づいた措置である。放置すると、短期間にできるだけ多くの場所を回ろうと計画し、家族経営の B&B でも相当遅い時間に到着する計画を立てがちである（中には22時頃投宿して翌朝 5 時台の列車に乗るなどという無謀な計画を立てる参加者も時々いる）。過去にはそのような無理な旅程を組んだ末、列車が遅れて目的地に到達できなくなったグループが、電話ボックスで夜を明かすという事態も発生した。列車の遅れ等でチェックインが18時に間に合わない場合には、宿泊施設に事前に連絡を入れるべきだと指導している。

5.2 鉄道に関する指導

旅程づくりにあたっては、宿泊地の決定と手配の他、交通機関が重要

である。乗車券については、移動のたびに現地で購入するのは手間としても煩雑であり、いわゆる乗り放題のレイルパス（外国人専用）の利用を推奨している（日本国内でもウェブで現地のエージェントから購入可能）。レイルパス利用推奨には他にも理由があり、個別切符は往々にして駅で購入に手間取ること、複雑な割引の制度の理解が難しいこと、同じ路線でも利用運行会社や時間帯等によって様々に運賃が異なること、昨今では突然のストライキにより事前に細かく手配していた個別の切符の返金対応が間に合わず雲散霧消してしまう可能性があること、日本と異なり乗越しに甚大なペナルティのある英国で下手な切符の買い方をしないようにすべきであること、などが挙げられる。

また、通常では想像しにくいことであるが、レイルパスは現地に行ってから購入すればよい（実際は外国人専用で英国内では入手できない）と勘違いする者がいることがあるので、注意を喚起する¹⁴。旅程については、nationalrail の HP であたりをつけ、最終確定としては実際の利用の12-15週間前（指定席の予約開始のタイミングと重なることが多い）に発表される夏ダイヤで確認することを指示する（従って例年6月頃は繁忙となる）。事前研修開始の秋の時点では翌年夏のダイヤがわからないので、あたりをつけて仮の旅程を組んでおき、後日確認することは極めて重要な作業である。

寝台列車 Caledonian Sleeper（個室）については1年前から予約が可能で、パスを後日購入する予定で寝台券部分だけを supplement として手配することも可能なので、できるだけ早期に予約するように指導する。その際に、安全上座席車両の利用を認めないこと、割引のユースパスでは、個室が2名用であるために、奇数での利用の場合は工夫を要すること（奇数グループ複数で合わせて偶数人数とするか、割高な単独利用を覚悟してグループ内で特殊な清算を行う）を伝えておく。

14 本稿を執筆していて気づいたが、日本国内からウェブでレイルパスが購入可能なので、現地でも駅でなくこの方法で購入できるかもしれない。あるいはアクセス元ドメインで制限がかかるのかもしれないが、ジャパンレイルパスでは外国籍のパスポート所持者の場合は日本国内でも買えるようなので、要確認である。案内のサイトを見ても英国内でのウェブ購入については何も記載がなく、英国籍でない者だけが購入できるとしか書いていない。厳しい解釈をしておいた方が安全であろう。

通常の列車指定席については、レイルパスによる日本国内からの無料の指定席予約は不可能なため、手数料がかかっても現地エージェントのウェブサイトでレイルパス利用者向けの指定席予約を推奨する。現地に行けば、鉄道駅でレイルパスを提示することにより、無償で指定席券の入手が可能だが、人気列車は売切れが予想され、日本国内での手配を推奨する。また最近では、LNER (London North Eastern Railway) 社のように、予約しなければ乗車できない会社や、Virgin Trainsのように他社よりもかなり早く予約が始まる会社もあるので要注意である。

さらに次のような注意を事前に与える。

- ・鉄道は通常指定席と自由席の区別がなく、座席予約が立て込めば全席予約されてしまうことがあり、予約なしだと積残しが出て予定の列車に乗れないことがある。
- ・中には指定が必要な列車、指定が不可能な列車がある。
- ・駅でレイルパスでの無料座席指定を受ける場合、原則として当日では不可能で¹⁵、事前であっても日曜や早朝夜間にはできないことが多い。
- ・英国では無札や乗越しが見つかりと高額のパナルティを支払わされる。
- ・列車が接続待ちをしてくれることはまずなく、5分差の乗継ぎなどを予定する場合には、失敗したときのプラン B を用意しておく。
- ・現地では発着番線が直前に変更になることがあるので、コンコースやホーム上の電光掲示に注意する。
- ・英国はキリスト教圏なので、日曜の鉄道やバスは大幅に減便となったり、始発が遅い時間になることが多い。
- ・寝台利用の場合、出発日もレイルパスの利用日としてカウントされる。
- ・ロンドンの地下鉄についてはクレジットカードでの改札通過を推奨。
- ・大きな駅ではすぐ乗車する人用 (immediate travel) と事前予約用 (advance reservation) の窓口が分かれていることがある。

15 エジンバラのように大きな始発駅では、当日でも出発5時間程度前まで可能な場合がある。

- ・英国では市域で10分以上、郊外で20分以上遅れる確率が7分の1¹⁶。
- ・コンコースの時計とホーム上の時計がずれていることがある。
- ・突然「運転士不足で運休」になることがある。
- ・同じ番線の両端に別々の列車が止まっていることがある。
- ・長大編成の列車が末端区間で分割される場合があるので、正しい行先の車両に乗っていることを確認する必要がある。
- ・ロンドンの地下鉄では同じ番線に異なる路線の列車が来ることがある。
- ・列車はドアが閉まると減速なことでは再度開けてはくれず、グループが生き別れになることがある（特にロンドンの地下鉄）。
- ・多くの列車は、到着時にボタンを押さないとドアが開かない。
- ・全員が寝落ちし乗り過ごすことがあるので、複数で交代して番をする。
- ・稀にホーム間の移動がエレベータでしかできず、乗換えに思わぬ時間がかかる駅がある。

その他接続するバス等についても注意が必要な部分がある。

- ・バス停で待っていても手を挙げないと止まってくれないことがある。
- ・原則乗車時の運賃支払いになるので行先を告げて言われた額を払う。
- ・その際に発行されるチケットをもぎ取るのを忘れないように。
- ・往復だと割引になることが多いので、希望の場合は運転手に申し出る。
- ・古いタイプのバスでは次のバス停の案内の電光掲示やアナウンスがなく、降りるバス停に注意しないといけない場合がある。

5.3 その他の準備指導

飛行機の荷物の制限については必ず事前研修の段階で確認する。航空券の関係で、旅行業者へパスポートの写しを申込書を送付する5月には

16 以前に定期購読していた『鉄道ジャーナル』誌で知った情報だが、残念ながらどの巻号か特定できない。現在もこの確率がそのままかどうかは不明。昨今は一定時間以上の遅れで乗車券を払い戻す制度を採用する運行会社が増えつつある。

用意しておく必要があるため、余裕をもって準備させる。留学生で英国にとって査証が必要な出身国の場合は、在日本英国領事館での手続きについて確認させる。あわせて、英国内でパスポートを紛失したときの出身国の在英大使館での手続きについて確認させる。また、日本の在留カードを英国で紛失したときの手続きについて、入国管理局へ確認させる。さらに、みなし再入国の手続きについても認識させる。加えて、現地では晚餐会があるので、標準的なテーブルマナーも伝えている。その他事前に伝えている指導項目には以下のようなものがある。

- ・英国はクレジットカード社会なので、現地で使えるタイプのカードを用意する（日本における予約の事前手配等でも必要になる）。
- ・初の海外利用や同日での複数回使用では、クレジットカードのストップがカード会社からかかることがあり、解除するための方法を用意しておく必要がある。対策としてある程度の現金の用意が望ましい。
- ・現金の事前両替は最低限でよい。但し前項目のケースをはじめ、現地での宿泊施設等でまれにカードリーダーの故障で現金払いを求められることがある。
- ・旅行業者への申込書での氏名表記はパスポートのスペルと同一にする。相違があると搭乗できないことがある。
- ・名だたる観光施設では入場時に手荷物検査があって、入場までに想像以上の時間がかかる可能性があるので、余裕のない計画は避ける。
- ・無料の観光施設でも、コロナ禍以降予約制のところがある。

現地への持参物については下記を必須としている。

- ・飛行機のeチケット
- ・パスポート（およびそのコピー：本体と同じ場所に保管しないように注意を促す）
- ・カレッジ発行の visa letter
- ・戸籍謄本（現地でパスポートを紛失したときの対策）
- ・クレジットカードと携帯の無効化・有効化の連絡先（盗難への備え）
- ・海外旅行保険書類
- ・ノートパソコン（連絡用。現地授業でも重宝する）

- ・体温計
- ・携帯（海外留学生安全対策協議会等緊急連絡用。現地洗濯機支払用）

6. 往復移動中の注意

移動中の団体行動では気を遣う。引率者が1人で、過去に移動したことがある筆者が先頭とならざるを得ないため、行列の最後尾が心配となる。過去には空港で一行から遅れた参加者が迷子になったこともあり、列の後方の参加者が空港職員から土産の食塩を麻薬と間違えられて取調べに引抜かれたのに気がつかないこともあった。移動の際はときどき点呼の機会を設け、その際に次の点呼ポイントを明示し、何かあってもたどりつけるようにしておくことが肝要である。

この他特に注意が必要なのは、預け荷物の中にパスポートやeチケットを入れてしまうことである。過去何度も遭遇した。これらがなければ搭乗のチェックインが出来ないのであまり緊急事態の心配はないのだが、チェックインカウンターで預け荷物を開けることになると並んでいる他の旅客に迷惑である。

また、海外旅行に慣れない参加者の場合は、税関等の写真撮影禁止区域で撮影してしまい、スタッフから注意されることがある。

7. 週末旅行に関する安全指導・現地対応

この研修では3回の週末があるが、現在では原則として第1週末が土日のうち天気のよい方で、ケム川 (River Cam) のパンティング (Punting) と隣村グランチェスター (Grantchester) の屋外果樹園喫茶店 The Orchard へのハイキングを行う。天気のよくない方では、ケンブリッジ市内（と年によっては隣町のイーリー）を範囲として自由に外出できる日としている。第2週末は金土日の3連休とし、第3週末は土日の2連休としている。

第1週末の土曜日もしくは日曜日（天候による）では、九州大学に野外活動届を提出した上で行う基幹教育言語文化基礎科目「学術英語・集中演習（ケンブリッジ大学英語・学術研修）」の一環としての活動があり、引率教員の責任で実施する。パンティングは業者の係員に漕いでもらい、カレッジ群を両脇に見ながら往復45分程度の行程だが、河岸が石材の建物や船着場になっている部分が多く、橋脚の横を通過する部分も

あり、事前研修の時点から、舟の端に手を掛けていると危険であることを警告している。また、漕手は平らな板の部分に立って棒一本で舟を操るため、慣れないと川に落ちることがある。全くの個人ツアーとして研修を実施していた頃には、個人的に舟を借りて自分で漕ぐ参加者もいたのだが、流れの緩い穏やかな川とはいえ深さもそれなりにあるので、部局の公式行事となった現在では、個人的に舟を借りて自分で漕ぐこと（self-punt）を禁止している。グランチェスターへのハイキングでは、沿道の植物にかぶれるものがあるので、素手で触らないように指導している。

また一般的な安全対策として、必ず海外留学生安全対策協議会のプランに団体として加入する。現地の緊急対応会社と提携しており、参加者が電話連絡すれば現地スタッフがかけつける仕組みである。また、万一事故や事件に巻き込まれた場合には、同協議会が参加者・引率教員と九州大学の間に入って各種の対応を行うことになっている。

週末旅行に関しては、カレッジへも届けることになっており、事前の計画をもとに筆者が一覧表にまとめて現地で提出する。事前でなく現地で提出する理由は、現地で携帯の SIM 交換を行う参加者がかなりいるので、新しい番号を緊急連絡先として聞き出す必要があるからである。現地到着から最初の週末を迎える前までが勝負なので、できるだけ早く（なるべく到着日翌日のオリエンテーション日の間に）交換して連絡してもらうことにしている。携帯はもともと緊急連絡用に必携としているため、海外からもつながるプランとし、家族等に必ず新しい番号を知らせよう指導している¹⁷。

その他の対応として、車椅子利用者への対応についての詳細は鈴木（2020）、留学生が渡英する場合の査証手続きやパスポート紛失に関する詳細については鈴木（2019）を参照。

17 料金節約のために、LINE 電話等ですべて済ませたいという相談を受けたことがあるが、2023年度現在、海外留学生安全対策協議会が参加者への緊急連絡手段として必要としているため、通常の電話での海外からの通話ができる体制を参加者に求めている。

8. 現地での様々な注意

週末に限らず、他にも安全に関わることにについて、事前にまた現地で指導を行う。最も大切なのは病気や怪我であろう。カレッジの看護師の体制などを予め知らせておく。英国では短期研修に海外からやってきた学生であっても、NHS (National Health Service) または提携医療機関にて無料で診てくれることが多いので助かる。従って海外旅行保険の出番としては大学病院や私立病院の場合である。これらについては学生教育研究災害傷害保険付帯海外留学保険に全員強制加入としているので、仕組みを筆者も承知しており、いざという場合は対応が容易である。

トラブル防止も極めて重要であり、カレッジからテロの場合の行動についての学習ビデオの視聴を求められたこともあった。その他様々な例を挙げて次のように参加者に注意を喚起している。

- ・昏睡強盗：パブ等で仲良くなり、飲料をおごってもらったので飲んだら睡眠薬が入っていて、寝ている間に荷物を盗られた。
- ・偽者警官：警官の制服らしきものを着た者にパスポートを求められ、荷物を床置きして取出し提示している間に他の者に荷物を盗られた。
- ・躓きすり：エスカレーターの降口で躓いた人がいたので介抱していると、その間に後ろから来た者に財布を盗られた（躓いた者も共犯）。
- ・写真料金：珍しい恰好をした者から一緒に写真を撮ってあげると言われセルフイしたところ、法外な料金を請求された。
- ・慈善募金：街で急に小物を差し出され、思わず掴んだところ、募金に感謝すると言われて法外な寄付を要求された。
- ・動物写真：かわいい動物連れの人が休んでいた所以動物の写真を撮ったら、法外な謝礼を要求された。
- ・荷物放置：友人とガイドブックを見るため舗道にバッグを置いたら、本を見ている間にバッグがなくなっていた。
- ・財布放置：パブでカードを財布から取出しカードをリーダーにセットすると、財布がカウンターに置いた数秒の間になくなっていた。

この他交通関係で日本の常識と違うところに注意が必要である。

- ・路地横断：大通りに面した横断歩道のない路地を横断中に、大通りか

- ら突っ込んできた車に轢かれそうになった（横断歩道無しで車優先）。
- ・歩行者用信号：あまりに青が短く転びそうになった（渡り切るまでは歩行者優先なので慌てなくてよい）。
 - ・自転車：借りて乗っていたら、ヘルメットなし、信号で無停車、手信号不使用、専用レーン無視を歩行者から咎められた。

また生活に密着した注意点もある。

- ・トイレ：公園トイレは利用時間制限があることがあり、特にロンドンに朝早く着くと、駅改札内以外に使えるところがないことがある。
- ・ウェイター：レストランで大声でウェイターを呼んだら叱られた（欧米文化圏では黙って手を挙げる）。

9. おわりに

本稿では、ケンブリッジ大学英語・学術研修について、コロナ対応と週末旅行の安全対策を振り返り、今後に向けて検討した。この研修は様々な面で特殊な部分があり、他研修での参考になる部分が少ないかもしれないが、何か役立つことがあると考え、本稿執筆に至った。

参考文献

- 鈴木右文（2013）『ケンブリッジ大学英語・学術研修への招待 名門校で学ぶ、暮らす、国際人になる』、九州大学出版会。
- 鈴木右文（2019）「海外短期プログラムの渡航手続きをめぐって―国籍で異なる査証取得と旅券紛失の対策はどこまで―」『英語英文学論叢』、九州大学英語英文学研究会、第69集、37-52。
- 鈴木右文（2020）「車椅子対応による短期海外プログラムの進化」、『英語英文学論叢』、九州大学英語英文学研究会、第70集、13-32。
- 鈴木右文（2023）「コロナ禍後の短期海外研修再開をめぐる諸問題への対応」、『言語文化論究』、九州大学大学院言語文化研究院、第51号、73-82。

Reinforcing Security of a Short-Term Study-Abroad Program

—Infections and Group Travels—

Yubun SUZUKI

In this paper, the author shows and reviews what he did in the advance training session at Kyushu University and in the summer program at Pembroke College for the participants of “the 2023 English and Academic Training Program at the University of Cambridge” for the purpose of improving the security levels of its future administration in the hope that this essay will be informative and helpful for similar programs across the globe.

First of all, he presents his endeavor toward coping with COVID-19 matters including 1) the delayed arrival of one student at Cambridge due to infection immediately before the originally planned departure day from Japan and 2) another student’s infection and isolation from the other students during the latter half of the summer program at the college.

The next part focuses on his meticulous advice tendered to his students in the past regarding how to create their weekend UK travel plans with appropriate and reasonable accommodation/ transportation above all in addition to destinations worth visiting. Furthermore, a new emphasis is placed on the possibility of industrial actions of railway workers with a short notice. He provides the participants with information covering security matters like burglaries, shakedowns, bogus police officers, drugging robbery, insurances, a crisis management scheme, health control, and traffic rules & manners.

The author sincerely hopes that careful consideration of these issues will lead to better management of the program, possibly at the same time giving helpful knowledge and insights to directors of other similar programs.